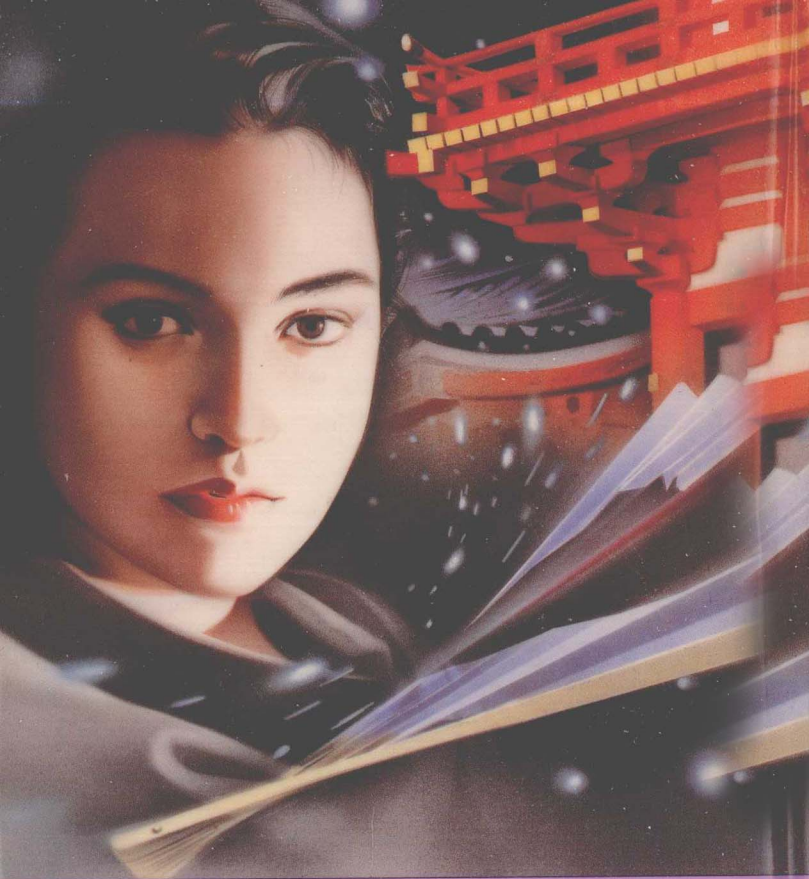




書き下ろし長編旅情ミステリー

し じょう どお

# 京都四條通り殺人事件

こ たに きょう すけ

## 木谷恭介

しじょうどお  
**京都四条通り殺人事件**

こたにきようすけ  
著者—**木谷恭介**

発行者—井上功夫／発行所—**柳双葉社**

〒一六二一 東京都新宿区東五軒町三番二八号

電話・東京〇三—五二六一—四八一八（営業）

東京〇三—五二六一—四八三三（編集）

振替・東京八—一七二九九

印刷—慶昌堂印刷株式会社

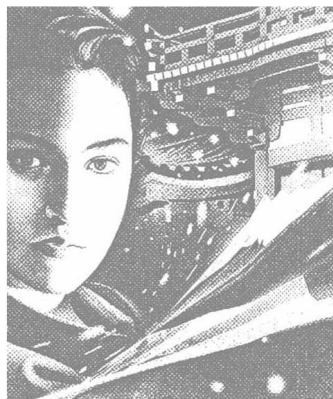
製本—株式会社川島製本所

●落丁本・乱丁本は本社にておとりかえいたします。

●定価・発行日はカバーに表示してあります。

©Kyōsuke Kotani 1991 Printed in Japan

ISBN4-575-00380-8 C0293



恭介

長編旅情ミステリー

四條通り殺人事件

**FN**  
FUTABA NOVELS







目次

プロローグ 7

第1章 淡雪の大原三千院 20

第2章 送られて来た挑戦状 48

第3章 生贄いけにえにされた人形 82

第4章 解けた暗号 118

第5章 送られて来た霊言集 158

第6章 作為の裏に潜むもの 190

エピローグ 217

あとがき 222

カ  
バ  
ー  
・  
イ  
ラ  
ス  
ト  
／  
石  
川  
俊  
本  
文  
イ  
ラ  
ス  
ト  
／  
山  
本  
博  
通

# プロローグ

## 1

「いよ、ここ！　ここに小野小町の屋敷があつたのよ！」

極太の毛糸で編んだ淡いベージュ色のセーターを着て、カラフルなスカーフを首に巻きつけた若い女性が、大声で手招きした。

「こんなところに？」

手招きされた女性は、十メートルほど離れた舗道で辺りを見まわした。

四条西洞院の角。

東へすこし行くと、京都駅から真つ直ぐにくる烏丸通りの交差点で、交差点のすこし先には大丸デパートが見えている。

その先は京都で一番の繁華街、四条河原町であつた。

この辺りはオフィス街なのだろう。四条通りをへだてた向かいが京染会館と京都共栄銀行。こちら側が八階建てのホテル、ユースイン・京都四条。ビルで埋めつくされている。

四条通りは車がビュンビュン走っているが、その割にはひとどおりがすくなかった。

オフィスの退社時刻の五時には、まだ三十分ほど間があるし、夕闇がうつすらとただよい始めている。

そのうえ、冬のまえぶれのような風が、音をたてて吹きすぎて行く。街全体がうつすら寒く、出歩くのを躊躇したくなる夕暮れまえのひとときであつた。

セーターを着た女性が興奮して、指を差した道路脇

に『化粧水』と彫った小さな石碑がたっていて、その

横の駒札に小野小町屋敷跡と書かれ、駒札の下はささやかな植え込みがつけられていた。

だが、石碑の後ろはタイル張りのビル。

小野小町ゆかりの石碑は、平べったい石の台座の上に据えられ、まわりには拳ほどのおおきさの小石が敷き詰められているが、軒先三寸借り受けましてといった感じで、いかにも肩身が狭そうであった。

「小野小町も住宅難なんだね」

手招きされた女性が駒札と石碑を見比べて、呆れたように微笑し、

「化粧水けしよすいって、小野小町の時代にもあったの？」

セーターを着た女性に顔を向けた。

「ケシヨウスイじゃなくて、ケワイミズって読んでよ。そりゃ、小野小町の時代にだって、化粧水けしよすいも白粉もあったと思うけど、このケワイミズってのは、女性の宗教家が歩いた跡に、湧き出る水のことにしよ」

「小野小町って宗教家だったの？」

「そうみたいね。遊行ゆぎやうの比丘尼びくにだって説があるんだ」

「だって、百人一首だと十二単衣ひとえを着たお姫さまじゃん？」

「だから、それは美化された伝説なんじゃない？」

「だったら、ここに屋敷があったってのも、無責任なものだね」

手招きされた女性は醒めた表情で空を仰いだ。

十一月下旬の夕刻すこしまえ。ビルに囲まれた狭い空に、天女の羽衣を思わせる雲がたなびいていた。

その雲がどす黒い茜色あかねに染まっている。

今年の夕焼けは、どこか紫っぽい。

フライピンで噴火したピナトウボ火山の細かい灰が、空を浮遊しているからだと、誰かがいついたけれど……。

二人は東京から来た女子大生であった。

セーターを着たほうしまおさきが島尾紗紀、手招きされたほう

が津村千佳子。

千佳子は白い長袖のブラウスを着て、肩に茶色のセーターを巻きつけている。

ふたりともジーンズでスニーカーを履いていた。

明日が土曜日で勤労感謝の日。明後日の日曜にかけて二泊三日、思いつきり京都を見て歩く予定であった。

「無責任なのは伝説だから仕方ないけど、わたし、ちよつとショックだなあ……」

紗紀はショックとは縁のなさそうな明るい声でいった。

「何が？」

「ほら、高校の二年の最初の古文のとき、辻田先生がいきなりいったじゃない？」

「何って？」

「この春休み、ぼくは京都へ行ってきた。まず最初に駆けつけたのは、四条西洞院角の化粧水で、むかし、

そこには小野小町の屋敷があった……」

紗紀は先生の口まねをした。

「へえ。あの先生、そんなこといったっけ」

「うん。わたし、そのとき、人生で初めての恋が破れて、まいってたんだけ。自殺したくなるほど落ち込んでたわけじゃないけど、気持ち減入ってた。勉強なんか手につかない気分だったのよね。そこへ、いきなり小野小町と来たじゃない。それも小野小町が恋したとか、恋されたとかいうのじゃなくて、四条西洞院角って具体的な地名でしょう。小野小町の時代の地名がいまも残ってるってことに、なんだかすごく感動したんだ……」

「わかるわかる。紗紀は失恋にこだわってる自分がちよつぱけに感じられたんだ」

「もうすこし、複雑で微妙なんだけど、結果的には四条西洞院角って地名が、わたしを立ち直らしてくれたんだ」

「それはわかるけど、それでどうしてショックなの」  
「だってさ……」

紗紀はあたりを見まわした。

かつて小野小町の屋敷のあった西洞院大路は、マンションの建ちならぶストリートに変わっていた。

化粧水の石碑と向かい合うようにパチンコ『スイス』のネオンが、けばけばしく輝き始めているし、千年の都・京都らしさは消えてしまっている。

「なるほど……。こうキャピキャピのビルが建ち並んだのじゃあ、紗紀のイメージがくるうってわけか」

「でしよう……」

紗紀は大袈裟に溜め息をついた。

「それもわかる。ここはわたしに任せておけて」

千佳子は軽く胸をたたいた。

「任せるって何を？」

「京都のムードをたっぷり味あわせてあげる」

「どこで？」

「すぐそこよ。京都には辻子<sup>ずし</sup>ってのががあるの」  
「ずし？」

「そう。路地のことだけど、京都で路地というのは、行きどまりの袋小路のこととて、とおり抜けのできる路地を辻子<sup>ずし</sup>っていうんだ」

「へえ……」

「たしか、すぐそこだと思ったな。膏薬<sup>こうやく</sup>辻子<sup>ずし</sup>ってのがあるんだ」

「膏薬？ サロンパスみたいなあの膏薬？」

紗紀が目を輝かせた。

好奇心の塊になっている顔だった。

「そう。その膏薬……。ほんとに空也<sup>くうや</sup>の辻子<sup>ずし</sup>だったらいいんだ。空也<sup>くうや</sup>上人<sup>しやうにん</sup>ついていたでしょう。奈良だっけ、口からちいさな仏さんを吐き出してる仏像があるじゃない？」

「ああ、あの空也……」

「そう。その空也が、平将門<sup>たいしょうもん</sup>の亡霊を供養した道場

があつたらしいんだ。空也の辻子が、いつのころか説なまつて膏藥の辻子になつたつて、ものの本に書いてあつただけど……」

「だけど、将門つて関東で暴れたんでしよう？ それがどうして京都なのよ」

「将門が反乱を起こしたのは関東だけど、討たれたあと、首は京へ送られて、晒さらし首になつたじゃないの。その首が故郷の関東へ飛んで返つて、着いたところが東京の大手町の首塚のあるところだつたつけ……」

「神田明神みやうじんじゃないの？」

「神田明神は祀まつつたところじゃないかな……。とにかく、いにしえの空也の辻子、現在は膏藥辻子がこのビルの向こう側のはずよ」

千佳子はユースイン・京都四条の裏を手で示した。

「ほんと？」

「ほんとよ。膏藥辻子には将門の祠ほくらもあるし、地藏堂があつたり、千本格子の家が並んでたり、これぞ京都

つて風情がいっぱい詰まつてゐるわよ」

「千佳子、そんなこと、どこで聞いてきたのよ」

「だから、ものの本で読んだつていつてゐるじゃん」

千佳子は論より証拠、行つてみようというように歩きだしていた。

ホテルのまえをとおり過ぎて、すこし行つたビルとビルのあいだが、細い小道の入口であつた。

とおり抜けができるとはいつても路地なのだから、ほんの細い路だと思つたのだが、幅が二メートル以上あり、入口には8時から17時のあいだ車輛通行禁止の交通標識が立つていた。

道路の片側に歩道をしめす白線までひかれてある立派な公道であつた。

辻子の入口は九階建てのビルだが、そのビルの横をすぎると両側の家の軒先が低くなつた。

急にタイムスリップしたような古風なベンガラ格子の家がならび、気のせいか辻子の奥は薄暗かつた。

夕暮れが間近な時間だから、辻子の奥から闇がただよい出てくるようで、空也上人が平将門の亡霊を供養したと聞いたこともあって、魔界へ入り込んで行くような気分がする。

「なんとなく探検のムードね」

紗紀は不安な顔になった。

逢魔が時おうちまというのは、この時刻なのではないか。

魑魅魍魎ちみもうりようが辻子の奥で、待ちかまえているような感じがする。

「京都千年の歴史の重みを感じるわね」

誘った千佳子のほうも心細そうだった。

辻子の一部に石畳が残っていて、アスファルト舗装と継ぎ接ぎはになっているのまで、いかにも年代を感じさせ、すこし奥へ入ると両側の家は千本格子に変わった。

その家の先の左手にちいさな通路があり、入口に表札が七枚もかかっていた。

千佳子が通路の奥をのぞき込み、

「庭みたいになってるけど、この表札の家の共有なのかな」

好奇心につられたように入って行き、

「祠ほこらがあるよ」

紗紀を手招きした。

「いやだ、将門ただって祟るんだから……」

紗紀はおよび腰で顔をしかめ、ギクツとしたように入ってきたほうへ目をやった。

四十歳くらいの男が、からだを折り曲げるようにして、早足に紗紀へ近づいてきたのだ。

「すみません。ちょっと見学させていただけます」

紗紀はそういつて軽く会釈をしたが、男は顔をそむけ、

「へいけ、四番目……。へいけ、四番目……」

小声で呪文のようにつぶやきながら、とおりすぎて行った。

両手で左の脇腹をおさえていた。

避けるように道をゆずった紗紀は、男の後ろ姿を見守り、ハッと目を凝らした。

石畳の上に、点々と黒いものが滴っていた。

それが、血だと気づくまで、五秒か十秒、かかったように思う。

「いまのひと、何よ」

通路の奥から戻って来た千佳子が紗紀を見つめ、紗紀は石畳へ指を差した。

千佳子の顔色が変わった。

「血、じゃない！」

「血、だわ」

そう思った途端に、石畳のうえの黒い滴が、急に真っ赤に変わり、生々しく光ったように思った。

「喧嘩、したのかしら……」

「だって……」

紗紀は四条通りの入口のほうへ目をやった。

辻子の入口から、ほんの三十メートルほど入っただけだし、千佳子とふたりで入ってきて、何分も経っていない。

通りで喧嘩など見かけなかった。

第一、ひとどおりが全然なかったのだ。

「とにかく、抜けちゃおうよ」

千佳子は紗紀の手を引っ張り、踏み出そうとした足を宙に浮かせるようにとめた。

三十メートルほど奥をよろよろと歩いていた男が、ばたつと倒れたのだ。

「どうしたのかしら？」

紗紀と千佳子は顔を見合わせ、それでも放っておけないものを感じて走り寄った。

辻子の両側には民家が建ち並んでいる。千本格子の出窓のついた京都らしい民家だった。

男はその民家の一軒の玄関のすこし先で、激しく痙攣していた。

「大丈夫ですか？」

紗紀が男の顔をのぞき込んだ。

男は顔をあげ、民家の壁へ虚ろな目を据え、

「う、うううう……」

と、口ごもるように呻き、次の瞬間、ゴボツと口から血を吐いた。

紗紀が飛びはねるように後ずさったのと、男の肩からぐつと力が抜けたのは、ほとんど同時だった。

紗紀は男が最後に目を据えた民家の壁へ目をやり、全身の総毛がよだつような不気味さを覚えた。

民家の壁と思ったのは漆喰で塗りかためた祠であつた。

縦横基盤目のように組んだがっしりした格子戸が嵌め込まれていて、その横うえにかかった木札に『神田神宮』と書かれてあつた。

「神田神宮って、将門じゃない？」

紗紀は千佳子へたずね、途端に格子のなかから、将

門の亡霊が手をのばして、つかみかかつて来るような恐怖に襲われた。

千佳子もおなじ恐ろしきにとらわれたようだ。

血を吐いて息絶えた男の怨霊に、足を掴まれるような恐怖が紗紀を襲った。

「将門だわ！」

「きゃあ！」

紗紀は悲鳴をあげ、千佳子の手をにぎって走り出していた。

膝ががくがくして、思うように走れなかった。

ふたりはもつれあうように辻子を走り出て、四条通りへ戻り、男の倒れているほうを、恐るおそる振り向いた。

辻子の奥は闇に沈んでいた。

並んだ民家の格子窓から明かりが洩れている。

「死んだのかしら……」

「警察に連絡しなくちゃあ……」

ふたりは顔を見合わせて、うなずきあつた。

2

パトカーが到着するまで、それから三分と経たなかつた。

パトカーが次々と三台到着し、サイレンを聞きつけたひとが、集まって来た。

「奥の将門の祠のまえに、お腹を刺された男のひとが死んでいます！」

紗紀と千佳子の話を聞くと、制服警官が四人、辻子へ入り込んで行った。

辻子の奥でも両側の家々から、住んでいるひとが出て来て、何が起きたのかキョロキョロしている。

辻子へ入って行った警官がすぐ戻って来て、

「男のひとなんか倒れとらへんで？」

咎めるような顔で紗紀と千佳子にいった。

「そんな……。神田神宮の祠のまえですよ」

紗紀が指を差すのへ、

「一緒に来てください」

警官は高飛車にいった。

「いやだな、気味が悪いわ」

紗紀が尻込みするのへ、

「将門はんは東京の神さんや。悪いことをしたら、すごいバチを当てる怖い神さんや。あんたら、ちゃんとたしかめんと祟りますで」

パトカーの横に残って、紗紀の話の聞き手にまわっていた四十年配の警官が、脅かすようにいった。

その目が笑っていたのは、通報したのが若い女子大生だからだろう。

紗紀と千佳子は引き立てられるように、神田神宮の祠のまえまで連れて行かれた。

複数の警官が懐中電灯で道路や祠を照らしているし、辻子の両側の家から、ひとたちが出て来ていたか